

武蔵野日曜集会

キリストの相成るまで

――ガラテヤ書4章――

1975年12月14日(武蔵野)

小池辰雄

神の子となる 同質性 神知りたもう 律法を正しく乗り越える 信行一如 全能者の現在を感ずる 体感された告白文学 神さまの息吹 キリストの同相会員 相即一如に生きる キリストの相成るまで

【ガラテヤ4】

1 われ言う、世嗣は全業の主なれども、成人とならぬ間は僕と異なることなく、² 父の定めし時の至るまでは後見者と家令との下にあり。³ 斯のごとく我らも成人とならぬほどは、世の小学の下にありて僕たりしなり。⁴ 然れど時満つるに及びては、神その御子を遣し、これを女より生まれしめ、律法の下に生まれしめ給えり。⁵ これ律法の下にある者をあがない、我等をして子たることを得しめん為なり。⁶ 斯く汝ら神の子たる故に、神は御子の御霊を我らの心に遣して『アバ、父』と呼ばしめ給う。⁷ 然れば最早なんじは僕にあらず、子たるなり、既に子たらば亦神に由りて世嗣たるなり。

⁸ 然れど汝ら神を知らざりし時は、その実神にあらざる神々に事えたり。⁹ 今は神を知り、寧ろ神に知られたるに、何ぞ復かの弱くして賤しき小学に還りて、再びその僕たらんと為るか。¹⁰ 汝らは日と月と季節と年とを守る。¹¹ 我は汝らの為に働かし事の或は無益にならんことを恐る。

¹² 兄弟よ、我なんじらに請う、われ汝等のごとく成りたれば、汝ら我がごとく成れ。汝ら何事にも我を害いしことなし。¹³ わが初め汝らに福音を伝えしは、肉体の弱かりし故なるを汝ら知る。¹⁴ わが肉体に汝らの試煉となる者ありたれど汝ら之を卑しめず、又きらわず、反つて我を神の使の如く、キリスト・イエスの如く迎えたり。¹⁵ 汝らの其の時の幸福はいま何処に在るか。我なんじらに就きて証す、もし為し得べくば己が目を抉りて我に与えんとま
で思いしを。¹⁶ 然るに我なんじらに真を言うによりて仇となりたるか。¹⁷ かの
人々の汝らに熱心なるは善き心にあらず、汝らを我らより離して己らに熱心
ならしめんとてなり。¹⁸ 善き心より熱心に慕わるるは、ただに我が汝らと偕
におる時のみならず、何時にても宜しき事なり。¹⁹ わが幼児よ、汝らの衷に



キリストの形成るまでは、我ふたたび産の苦痛をなす。20 今なんじらに到りて我が声を易えんことを願う、汝らに就きて惑えばなり。

21 律法の下にあらんと願う者よ、我にいえ、汝ら律法をきかぬか。22 即ちアブラハムに子二人あり、一人は婢女より、一人は自主の女より生まれたりと録されたり。23 婢女よりの子は肉によりて生まれ、自主の女よりの子は約束による。24 この中に譬あり、二人の女は二つの契約なり、その一つはシナイ山より出でて、奴隷たる子を生む、これハガルなり。25 このハガルはアラビヤに在るシナイ山にして今のエルサレムはその子らとともに奴隷たるなり。26 然れど上なるエルサレムは、自主にして我らの母なり。27 録していう『石女にして産まぬものよ、喜べ。産の苦痛せぬ者よ、声をあげて呼われ。独住の女の子は多し、夫ある者の子よりも多し』とあり。28 兄弟よ、なんじらはイスラエルのごとく約束の子なり。29 然るに其の時、肉によりて生まれし者、御霊によりて生まれし者を責めしごとく今なお然り。30 されど聖書は何と云えるか『婢女とその子とを逐いいだせ、婢女の子は自主の女の子と共に業を嗣ぐべからず』とあり。31 されば兄弟よ、われは婢女の子ならず、自主の女の子なり。

●神の子となる

では、ガラテヤ書第4章に入ります。

1 われ言う、世嗣は全業の主なれども、

家督制度で世嗣といわれるような人は、全業、全産業、全財産を嗣ぐべき人であると。

成人とならぬ間は僕と異なることなく、

成人しないあいだは、世嗣といえども僕と同じで、別に主たる実質を備えていないというわけです。

2 父の定めし時の至るまでは後見者と家令との下にあり。

だから、その権威もまた自由もないというわけです。

3 斯のごとく我らも成人とならぬほどは、世の小学の下にありて僕たりしなり。

福音の世界がこの大人の世界です。律法の世界はそうじゃない。主に対して僕という意味において、そういった旧約と新約の関係をパウロはこのように言っているわけです。「世の小学」とは即ちこの場合は律法のことを指している。あるいはギリシャの哲学やなんかも入っているかも知れない。パウロは両方とも教育を受けていますから。

4 然れど時満つるに及びては、

即ち、キリストが来たことが「時満ちた」ということです。この場合の「時」というのは「ク



ロノス」という字です。クロノスがプレローマした、時が満ちたという。

神その御子を遣^{つかわ}し、これを女より生まれしめ、律法の下に生まれしめ給えり。

我々と同じような弱き罪びとの姿で同じ地上に置いたわけです。即ち、イエスはユダヤ人ですから、伝統的にいつてユダヤの律法の下にいたわけです。

⁵これ律法の下にある者をあがない、

パウロもそうでしたが、自分たちと同じように律法の下に、旧約の限界内にあるものを贖う。即ち、こないだやったように、イエスは十字架に架かって贖い、^{のろ}詛いの死を遂げた。そして、律法の詛いから我々を解放したとありましたね。

我等をして子たることを得しめん為なり。

それで、神の子となることが、福音を受けることによつてできるようになるためであると。ガラテヤの諸教会に、このことは第一回伝道で^{とうとう}滾々と語ってきたのに、また律法の下に戻つてしまったから、パウロはまたその構造をはつきりさせるためにこんなことを言っているわけです。

⁶斯く汝ら神の子たる故に、

もう今は神の子である。

神は御子の御霊を我らの心に遣して『アバ、父』と呼ばしめ給う。

この『アバ、父』と呼ばしめ給う』というのはローマ書にも出てきます。キリストが十字架の贖いを遂げたあとに、聖霊が来た。十字架の贖いなしに、聖霊は来なかった。これは地上において弟子たちがいくらキリストと一緒にいても、御霊が臨まなかったことが事実証明しているわけです。ペテロを筆頭にみんなキリストから離れてしまった。

「汝らもこの牧者^{ひつじかい}を捨ててるか」

というようなこともキリストが言われたわけです。復活したキリストにでつくわしても、まだ本ものではない。だいたい喜んで喜んだけれども。聖霊が来て、彼らが本当に立ち上がったわけです。甦りのキリストにでつくわして、彼らは半分甦ったけれども、まだ本ものではない。本ものになつたのは、聖霊が来てからです。聖霊が来て、本当に神さまをキリストと同じように「父よ」、「お父さま」と呼べるようになる。

●同質性

キリストが、

「汝ら祈るときに、かく祈れ」

と言つて、

「天にまします我らの父よ」

と祈られた。キリスト教会では、クリスチャンはみんなこれをそらんじているわけです。ところが、聖霊を受けないで、「天にまします我らの父よ」と祈つても実は、まちがい



とは言いませんけれども、それは本当の現実とはなっていない。言葉の単なる繰り返しに、空念仏になっている。それではダメなんです。

キリストと同質ですから。御霊が来たということは、同質にされたということです。この同質性というものが、どうもプロテスタントは受けとっていない。何か、「罪びと、罪びと」と言って、ただ隔絶のことばかりで、断絶的な関係を、関係にもならないようなことを言っている。そして、ただその罪の贖いを、十字架という命題ばかりを信じている。ひとつもその同質の世界に來ない。

「同質なんて思うことは、とんでもない思い上がりだ」

なんて思っている。そうじゃないんです。絶対恩寵の御霊における同質なんですから。それを受けとらなかつたら、救いは來ない。その意味において、同質であるということが大事なわけです。

「斯く汝ら神の子たる故に、神は御子の御霊を我らの心に遣して『アバ、父』と呼ばしめ給う」

という、この6節は非常に大事な内容です。これは、しかしながら、5節の、

「律法の下にある者をあがない」

という土台があるから6節が來たので、このキリストの贖いなしに同質なんて言ったって、それはいわゆる神人合一的な神秘主義になる。それもまちがいです。贖いの命題ばかり信じて、同質に來ないのもまちがいです。よく、パウロの構造と実質をつかんでください。

7 然れば最早^{もはや}なんじは僕にあら^ず、子たるなり、

非常に楽なんです。

「キリストは神の子である」

ということは「同質である」ということ、存在的なことなんです。また別な意味で、

「キリストは神の僕である」

ということとは使命的なことなんです。神の命令を受けとって、それを体現していくという、その姿は僕です。「エホバの僕」ということは、さっき言っている「僕」とは意味がちがう。そこは間違わないように。4章で言っているのは律法の奴隸としての僕ということですから。

既に子たらば亦^{また}神に由りて世^{よつぎ}嗣^{また}たるなり。

この「神に由りて」というのは「キリストに由りて」と同じことです。この「よりて」というのは原因を表す「ディア」という言葉です。

8 然れど汝ら神を知らざりし時は、その実神にあらざる神々に事^{つか}えたり。

偶像崇拜をやっていた。「神を知らざりし」というのは、キリストを知らなければ神を知らないわけです。

「汝らキリストによって神を知らないときは、その実神にあらざる神々を信



じたり」

と。今の現代人がみんなそうです。神にあらざる神々に仕えている。文化文明という神々に仕えている。文化文明の奴隷になってしまっている。何も我々は文化文明を否定するわけではないけれども、それがその上に在るものを忘れてしまっているから、どうにもならん。

9 今は神を知り、寧ろ神に知られたるに、何ぞ復かの弱くして賤しき小学に還りて、再びその僕たらんと為るか。

再びまたユダヤの律法に還るか、ギリシャの哲学に還るか。まあ、哲学はあまりユダヤ人は知らなかったでしょうけれども。

「小学なる律法に還りて、再びその僕たらんとするか。とんでもないはなしだ」ということです。

●神知りたもう

「神を知り、寧ろ神に知られたるに」

と、パウロが言い返している。「神を知る」のは、申し上げているとおり、キリストに在って神を知る。けれども、我々が「神を知る」ということよりも——これはちょうど、「神を求める」よりも、

「神の方が求めたもう」

ということが根底であり、力強いことは申すまでもないこと。子どもが、小さな子が母親に呼びかけるよりも、母親が子どもを呼びかける方が強いわけです——「むしろ、神に知られた」ということです。

「神知りたもう」ということの「知る」という内容は非常に深い。あなた方一人びとりがその、

「神知りたもう」

と告白するとするなら、その「知りたもう」という内容は一人びとりみんなちがう。一人びとりは人格的絶対存在ですから、それは比較を絶したものです。みんな一人びとりが天下一品です。神さまはそのように一人びとりを知っておられる。良きも悪しきも一切を。「神知りたもう」ということを本当に自覚すれば、神の前に平伏すわけです。神の前に平伏し、畏れ親しむ。畏れ親しむということが大事です。いわゆる馴れつこになるのでもなければ、また恐がるのでもない。自分が本当に降参した姿で畏れる、畏敬の念です。それから、親しむ。詩篇2篇におもしろい言葉がある。

「畏れをもて口づけせよ」

と。その畏れ親しむということ。それが、

「神、我を知りたもう」

というときにも、そちらの気持が畏れ親しむということ。頭で知るのではないですよ。聖書の事態は全部、全存在的です。



パウロは、今までは律法を金科玉条にして、これ以上のものなしとして、彼は律法を誇っていた。律法における自分の義を誇っていた。それがもうガラリ変わってしまったて、律法の自分を塵芥の如く思った。しかし、パウロはまたもちろん別に、

「律法は聖なるものにして」

と言ってますから、本当の精神を知っているわけですね。あとから知った。キリストに贖われてやつと知ったわけです。律法は神さまの意志の表現ですから、神さまの意志の表現を實行するためには、神さまの意志を受けとらなければ、やはり枝葉のことになる。

ちようど、カリスマ的なこともそうなんです。カリスマ的ないろいろな神の力ある現象を本当に受けとる人は、その奥の、世界を受けとっているわけです。だから、御利益にはならない。ところが、すぐ御利益宗教になったのではしょうがない。

「病気が治った。めでたしめでたし」

なんてのは御利益宗教になる。病気が治る奥の世界です。その意味において、律法を本当に全うしたのはイエス・キリストである。だから、全うしてこれを廃止したわけです。

●律法を正しく乗り越える

10 汝らは日と月と季節と年とを守る。

安息日や一日とか何とかやっているでしょ。どの月がどうだと。祭の季節やいろいろあるわけです。ヨベルの年とか、ユダヤの律法に出てますから、士師記あたりに。

11 我は汝らの為に働かし事の或は無益にならんことを恐る。

「またそんなものにこだわっているか」と。

12 兄弟よ、我なんじらに請う、われ汝等のごとく成りたれば、

「汝ら」というのはユダヤ人と異邦人とが混ざっている「汝ら」です。この場合も、「汝ら」というのは、どうも異邦人の方が多らしい。

「汝等のごとく成りたれば」

というのは、

「あなた方と同じように律法の下にないようなものに成った」

ということ。異邦人はもともと律法を持っていないから。

汝ら我のごとく成れ。

今度は、ただ律法の外にいたということばかりでなくて、

「律法を本当に乗り越えた、福音の中にいる自分のように成れ」

ということ。律法のないのいいのではない。律法は大事なものです。けれども、律法を正しく乗り越えなければいけません。「律法なんかどうでもいい」と言っているのではない。律法を正しく乗り越える世界、それが福音の世界です。

今、日本は



「道徳なんてものはもうやめた」

なんて言っている。本当に道徳を卒業してればやめてもいいけれども。それでなくて、妙なお題目的に「民主主義だ」なんて、とんでもない間違いだ。

汝ら何事にも我を害いしことなし。

結構でしたよと。

13 わが初め汝らに福音を伝えしは、肉体の弱かりし故なるを汝ら知る。

第一回の伝道のこと。おもしろいことが書いてある。パウロは何か病氣をもっていたらしい。どうも眼の病氣だったらしいね。ちよつと後の方に書いてある。眼の病氣か、癩癧かなんて言われているわけです。パウロはまた性格も烈しかったから、あるいは癩癧的なものがあつたかも知れない。

14 わが肉体に汝らの試煉となる者ありたれど

「試煉となる」というのは、

「パウロはちよつとあれはうまくないから」

と言って、パウロに対する信頼が薄れるかも知れないという意味らしい。何かあまり感じのいい病氣でなかったらしいよ。

汝ら之を卑しめず、又きらわず、反つて我を神の使の如く、キリスト・イエ

スの如く迎えたり。

パウロのそういった欠陥にもかかわらず、パウロの中にあるところの相を見て、そして、神の使の如く、キリスト・イエスの如くに迎えてくれたと。

「人は上辺を見るが、神は、神の使いは、天使は内を見る」

と言います。彼らも、天使の如くパウロの内にあるものを見て、迎えてくれたわけです。

15 汝らの其の時の幸福はいま何処に在るか。

福音を受けとって、あんなに喜んでくれたのにと。それは福音に圧倒されたわけなんです。それで非常に喜んで、神の使の如く、キリスト・イエスの如く迎えた。また、パウロを通して力が現れましたから。

「そうだったのに、どうしちゃったんだい、初めの感激はどこへ行ってしまったのか」

と。あなた方も氣をつけないと、初めの感激がどこかへ行ってしまったって、何かショボショボしてたらダメだよ。いろんなことにでつくわせばでつくわすほど、本当に力が出てこなければダメです。何か少し波風に揺られたり、調子が悪かったり、試験をやりそこなったり、失恋したり、まあ、いろんなことが起きますよ、若いから。しかし、そういうことにでつくわせばでつくわすほど、いよいよ力が出てくれば、それは本ものだ。そうなってしまう。行き詰まりを知らないことになる。



●信行一如

「⁸われら四方より患難を受くれども窮せず、為ん方つくれども希望を失わず、⁹責めらるれども棄てられず、倒さるれども亡びず」(コリント後4:8-9)

という。「信仰、信仰」と言っている信仰の使徒パウロが、いかに力強い生命に満ち、全く創造的であるか。「信仰のみ」と言っているパウロが、「行為のみ」と言ってもいいくらいに、彼は最も行動的であつた。パウロにとっては、「信仰のみ」は「行為のみ」と同じなんだ。まだそんなことを言つたプロテスタントのあれはないだろう。私は信行一如と言っている。私はあなたの方の姿を見ていて、少し情けなく思つた。あまり言いたくないけれどもね。「小池辰雄刊行会」と言つて、あなたの方は刊行会の主体でしょうが。それがどれだけのことをやっているんですか。二、三の人は本当に一人でも来て発送の仕事をやっています。あとは知らん顔ではないですか。電話で

「どこまで行っているか？」

とか、どうだとか聞いてきた人があるか。私は毎日やっているんだよ。それはいらつしやなくて結構です。けれども、氣持が本当にあるかどうかを私は聞いている。一週間のたとえ一回でも、一時間でも、お手伝いに来るといふくらいの氣持はないんですか。もしないなら、「刊行会」という名前はやめてください。私は自分でやりますから。

このキリストに本当に掴まれて、

「キリストのみ、信仰のみ」

と言っているパウロはいかにキリストを生きたか。「キリスト相」とは何ですか。本当に愛をもつて行動することではないですか。

¹⁵汝らの其の時の幸福はいま何処に在るか。我なんじらに就きて証す、もし為し得べくば己が目を抉りて我に与えんとまで思ひしを。

それくらいまで、私のことを思つてくれたのではないか、今はどうしてしまつたんだいと。パウロも嘆いている。

¹⁶然るに我なんじらに真を言うによりて仇となりたるか。

本当のことを言つたのでそれが仇となつたか。それでは本当に聞いているのではないではないかと。

¹⁷かの人々の汝らに熱心なるは善き心にあらず、汝らを我らより離して已らに熱心ならしめんとてなり。

そういう横槍が入ってきて、そのために徒党的な勢力が働いている。

¹⁸善き心より熱心に慕はるるは、ただに我が汝らと偕におる時のみならず、

何時にても宜しき事なり。¹⁹わが幼児よ、

というのは、自分が福音を説いた人たちをただ初歩だからこう言つたので、何もいわゆる幼児ということではない。信仰のまだ初歩な人たちのことです。



汝らの裏にキリストの形成るまでは、

「形」という読み方をしてもいいですけど、私は「相」と言いたい。キリストの相が成るまでは、

我ふたたび産の苦痛をなす。

聖霊の事態のことにあつてですよ、それで、いい加減なことでは済まないんです。

この前、天台宗の人に会ったけれども、彼らはやはりその勤行をやっている。何も勤行が悪いのではないけれども、とにかく、実存というならば、空念仏ではダメだ。私はこの本(『無者キリスト』)に「実存」という言葉をたくさん使っています。しかし、それが何か空念仏式になったらダメです。

●全能者の現在を感じる

ゲートルが23、24歳の頃に、あの『若きウエルテルの悩み』という本を書いた。その5月10日のところに出ている句です。

「茎の間の小さな世界のうごめきを、長虫や羽虫の無数の究め難い形相を心に身近に感じ、そして我々をその似姿に創りなされた全能者の現在を感じ、我々を永遠の歓喜の中に漂わせつつ荷ない且つ保ち給う一切を愛する者の息吹を感じる。――わが友よ、さてそこで僕の眼のまわりが黄昏れて周囲の世界も天空も全く僕のたましいの中に、恋人の姿のように憩(やす)ころうとき、僕はしばしばあこがれの念にかられて思う、ああ、これを再現できればいいなあ、紙面に息吹き込めればいいなあ、かくも満々とお前の中にあたたく生きているものを！ お前の魂が無数の神の鏡であるようにそれがお前の魂の鏡となるように再現したいと念(ね)づ。」(私訳)

素晴らしい句です。23か24歳のゲートルのこの言葉は一生を通じての彼の魂の相なんです。

「茎の間の小さな世界のうごめきを、長虫や羽虫の無数の究め難い形相を心に身近に感じる」

という。この「感ずる」ということが大事なんです。体感する。身体で感ずる。身体で感ずるということは全存在で感ずるということです。そのように感ずるときに、

「全能者の現在を感じる」

という。自然界のそういうものを感じることが同時に「全能者の現在を感じる」という感じ方をしているんです、彼は。ゲートルという人は自然において神の息吹を感じている。「神・自然・我」ということ。

「神は自然を超越している」

というような把握も彼はしています。けれども、

「自然の中にいかに神の神性が溶け込んでいるか」

ということですよ。



●体感された告白文学

そんな気持で今の日本人は自然を見ているかと言うんだ。自然を感じているかと言うんだ。こんな美しい自然に恵まれているが、そういう宗教的な、何と言いますかね、この花はこうやって移ろいゆきます——移ろいゆく花において、移ろわざるものを見ているかというんです。

「花は枯れるから儂^{はかな}いな」

と言って、ただ無常の感じではダメです。無常なるもの、儂きものにおいて儂くないところのもの、永遠の相をそこに見る人は、本当にこの花を見ている人です。現在という瞬間において永遠を把^{つか}んでいるような生き方をしなければダメなんだ。「永遠」というのは何か時の無限の長さなんて、そんなことを思っていたんじゃないやダメだ。そんなものは空想にすぎない。

これは偽りなく、ゲーテという人はすべて体感して動いている人です。彼の文学は全部、その体感されてくる告白文学です。それだから、無限の味を持っている。いくらゲーテ研究が何冊出ようが——相変わらずゲーテ研究書が一番多い——尽きない。無尽蔵なんです。彼は無尽蔵の世界に生きていたから。けれども、研究の仕方がどうもその本質に触れてないのが多いね、いわゆる頭の研究だよ。

私は『ウエルテル』のここを読んだ時に——私があなた方の年輩の時に読んだときは、多少、感情的に感じたくらいだったけれども。今、私がこれを感じているような感じ方はその頃はしなかったでしょうけれども——『ウエルテル』を旧制高等学校の2年生の時に読んだときの、その何とも言えない雰囲気はいつまでも私の中に残っています。

「我々を彼の相^{すがた}に従って、相の通りに創^つてくださった、その全能者」

という。大学の文学や哲学をやっている先生が聖書を読んでないんだから、これは困ったもんだ。よく講義できるなと思う。こういう言葉の中に聖書がちゃんともしみ込んでいるんですよ。どういうんだろうね、日本の学者というのは。聖書だけは敬遠しているのかね。聖書にしる、仏教の方にしる、何と言ったって、東西の精神界の二大潮流というのはキリスト教と仏教ですよ。それに食いつかないで、何だというんだ。

私は大学で「ドイツの宗教」の講義で相当脱線して話しているけれども、本当に感激しているやつは何人いるかね。今日は一人か二人やって来られたけれども。そういうのは本当に感激してやって来られた——大体、教室の後ろにいるやつはダメなんだ——最前列にいらつしやる方です、これは。まあ、私の講義は大した講義ではないでしょう。けれども、そこにある気合は捕まえてくれなくては困るんだよ。私は主観でものを言っていないんだから。これをあなた方は若い時に捕まえたなら、先はどういうことになるか分からないくらいに、洋々たる前途がある。私は50歳くらいになってやっとこの聖霊の世界に入ったから、まだ22、23年だ。



●神さまの息吹

そういう、創ったそのひとを感じる。一切を愛する者の、神さまの息吹を感じる。しかも、その一切を愛する者は永遠の歓喜の中に私たちをたゆとうようにもたげ、そして捕まえていくのださるところのその永遠者。それを感じるという。

私がちょうどあなたの方の年輩の頃に――よかったんだよ、あの頃は――駒沢の新町に丘陵地帯があつて、南斜面に田圃^{たんぼ}があつて、向こうに森があつて、それから秩父の連山が見えて、富士山が見える。そこへ日曜日の午後には藤井先生と出かけて行つて――私たち三、四人の青年だ――そこでダンテを読んだり、カントをやったりした。あの時の情景はいつまでも私に残っている。もう今行ったら全然跡形もない。災いなるかな東京だな。東京は文明が行き過ぎてしまった。何しろ、千駄ヶ谷で芹^{せり}を摘んだりしたんだから。

どうぞ、皆さんは、このゲーテではないけれども、時々、自然の中に入つて、自然の懷に入つたら、神さまの懷と思わなくては。

「友よ、それから、眼の周りがかげろつて来て、そして空が全く私の魂の中に憩う。それはちょうど恋人の姿が私の中に憩うようなものだ。もしそれを紙に表現できたらいいなと思うけれども、とても描けるものではない。かくも息吹きかかり、かくも暖かく自分の中に生きているところのこの事態、これはちょうど私の魂の鏡のようだ。それは私の魂が永遠の無限無量の神さまの鏡であるが如く、自分の魂を神さまの写し絵として。それはちょうど自分と自然界と恋人との関係と同じように」

という素晴らしい句です。

「大自然を熱愛した彼は、その草間の微細な虫の小世界のうごめき、その無数の究め難き形相を体感している。そのことは同時に人間をおのが像^{かたど}に象つて創造した全能者の現前の体感と相通する。そのような天然と神に相通うものは何であるか。それは「我々を永遠の歓喜のうちに漂わせつつ荷い且つ保つ一切を愛する者の息吹」である。「一切を愛する者の息吹」を体感するゲーテの魂の質はその青少年時代から晩年に至るまで一貫して変わらない。云々」(著作集第2巻『芸術のたましい』137頁参照)

と書いてあるわけです。

●キリストの同相会員

だから、神と同じ質、同質、同相に造られている私たちであるということですよ。

「本来衆生^{しゅじやう} 悉く仏性^{ぶつじやう}あり」

という。仏の性というが、神性というが、どちらでもいいですよ。そういう同相同質ということ。「キリストの同相会員」という、こんな言葉を私はここに書いたけれども、あなた方は忘れないでくださいよ。キリストの同相会員にならなかつたらどうしようもない。こういうわけです。



ゲートが「メタモルフォーゼ」ということをよく言っている。同じ相を持っていながら、それが千変万化に展開していく。同質でありながら、いろんな姿をもつて展開していくのが本当の在り方です。ただ固執するのではない。質は同じ。相は同じ。けれども今度は、外側の形はどしどし変形していく。だから、私は「相」という言葉をここに使うわけです。「形」はむしろ外側の姿です。これは変形変貌していく。キリストの変貌もある。あれは変貌したって、キリストの質は同じなんだから。外側は変貌してしまっただけ。日の如く輝いてしまっただけ。眩しくて見えない。ゲートもそういう人なんです。展開してやまない。

ベートーヴェンの音楽だつてそうだよ。交響楽の根底にはドイツの民謡の響きがあるという。文学もそうですよ。お伽話は、メルヒェンは文学の始めで終り。メルヒェンの本当の意味がわからなければダメだというわけです。あなたの方の中で誰か本当に、この信仰からしてメルヒェンでも作つてごらんよ。アンデルセンに負けないように。それから歌でもいいよ、「荒城の月」みたいな曲を。こんなやさしいんだつたら私も作るんだつたと(笑)。

とにかく、御霊の知恵と力でどしどし変形変貌してくださいよ。ただし、この同相を持つていなければ、本当の変質変貌はできない。それでもし変質変貌したら、今度はガタガタになってしまう。わかりますか。変わりが変わらざるもの。月は三日月になったり満月になったり、いろいろ変わるよ。しかし、月には変わりがない。

●相即一如に生きる

ゲートという人は非常に宗教的な人ですよ。特に宗教なんて言わなくても、その世界に溶け込んでしまっているんだ。レット・クリスチャンで理屈っぽいような、ただ聖書を外側で読んでいるのとはおおよそ違う。彼は一生、本当に聖書を身読していた。

「万巻の書のうちの書は聖書である」

と彼はちゃんと言っている。そのゲートを研究するゲート研究家はたくさんいるけれども、聖書を読んでいないんだから、あきれてしまう。どういうんだろうね、これ。今のキリスト教が悪いんだね。

「あんなキリスト教は、それじゃよしておこう」

なんて。聖書までよしてしまう。ダメですよ。あなた方はもう、おおよそ因習的なものをどしどし本当の意味において破つていなくては。破るとは、何も造反になれということではないけれども、本当に進んでくださいよね。ゲートの非常に短い詩にこういうのがある。

「自然観察においていつもお前たちは一つのものを一切として、いつもそれを尊重

せよ、認識せよ」

と。

「二において一切を見ろ」という。



「二つの石を見て、宇宙を見ろ」

という、あのブレイクの詩と同じだ。今度は一即多、一即全という。

「何も外側にはない。また、何も内側にはない。内も外もない。内だの外だの言っているうちは、まだ本ものではないぞ」

と。内は外なり、外は内なりという。これも内外相即の世界です。ゲートルという人は相即一如に生きている。「神・自然・我」が一つです。

「神さまの造ったものは善からざるものなし」

という。こういう、いろいろな花がある。水仙、菊。水仙を見れば水仙となり、菊を見れば菊となる。星を見れば星となり、太陽を見れば太陽となる。雲を見れば雲となる。そういう魂になるというのは、

「そういう一如の相になってそれを体感して、生命の本当の連なりをそこに感ずるような人になれ」

ということです。そうしたら、それは何ともいえない、本当に大自然のような人になる。本当の芸術家はそれでなければダメです。自分の主観があつて、何か腕を発揮しようとしたって、そんなものはひとつも本ものでない。まあ、ゲートルだ、ベートーヴェンだというのはそういう魂です。

それから、

「何となれば、内側にあるものは、それは外側だ」

と。内に溢れるものは外に表れる。キリストが言ったでしょ、

「善き木は善き実によって知られる」

と。

「ああ、いい実がなっているな、この木はいいな。何だあの木は、ちつとも実がない」

と。クリスチャンでもそうだよ。実のならないようなクリスチャンだったらしょうがない。「信仰、信仰」なんて言つてね、信仰ばかり凝り固まつていて、ちつとも実存に展開しない。

「はて、どうしたら、実存に展開しましょうか？」

なんて、そんなのではないですよ。内外相即の世界です。溢れてくる。溢れざるを得ない。生きざるを得ない。愛せざるを得ない。担わざるを得ない、展開せざるを得ない、行動せざるを得ない。そういうような事態は――人間は、我々は自我にとらわれるから――一切を突き破って行かなければダメです。

だから、

「己を憎まずば我が弟子となることができない」

ということとは、

「己を本当に憎んでみろ、それが一番本当に愛していることになるぞ」



ということです、キリストは。

「私がお前の中に入ったらば、お前は本当に神の現象体、キリストの現象体となるぞ」

と。それが使徒行伝の使徒たちではないですか。パウロがあのもの凄い艱難をなお突破していった。普通ならもう仆れてしまっているでしょう。それが、「信仰のみ」と言っているパウロですよ。そのようにして行動してごらん。力が出るから、本当に。そうでなしに、絶対に力は出ません。

私はいわゆる休日はないんだよ。何かやっているんだ、私は。それを、やっているなんて思わないです、神さまに動かされているから。楽しいです。これも静動一如です。動中にちゃんと静がある。泳ぎのこともそうなんです。スクロールをしながら、ちゃんと全身を波にもたれてしまう。その次のスクロールの前にちゃんと休んでいる。楽に。波が来ようが、かぶろうが、一向差し支えない。その呼吸なんです、やっぱりすべて。外側の調子が悪ければ悪いほど、内側の調子はよくなる。運命・環境はどうだっていいですよ、そんなものは。それだけのものをキリストは皆さんにくださっているんです。それでなしに、「キリスト」なんて言わない方がいいわ。

私はさつきちよつと烈しいことを言っただけでもね。もちろん、あなた方の中に誠意があることは知ってます。だけれども、もつと行動に表してください。

●キリストの相成るまで

「躊躇なく、そういう事態を捕まえなさい」

と。内外相即の事態を。もちろん、「内」ということは、内側ということとは一番大事なことですよ、中心は内なんだから。けれども、それをただ「内外」と言ったり、「信仰と行為」と言ったりして、分けているうちはダメだよということです。だから、私は今の無教会の信仰にはプロテストするよ。御霊の世界はつきり私にそう言わせるから。

「私が完全な人間である」

なんて、決して自分で思ってはしませんよ。ダメな野郎です。けれども、そのようにして、躓いても転んでも、展開してやまないんです。

「あなた方は、この神聖にして啓示されたところの、明らかなるところの神秘を躊躇なく捕まえなさい」

という。蕭々たる神秘の世界。とにかく、ゲートルはその回りの連中とはケタが違うからね。彼も、あるところでは、おもしろいことを言っているんだよ。

「こんな体裁みたいな社会はごめんだ。私は絶海の孤島に行きたい。野蠻人と暮らしたい」

なんて、ゲートルがそんなことを言っていることを知って、私はびっくりした。



「自分は本当に偽りなくものを言っているものだから、みんなに憎まれてしょうがないんだ」

というようなことも言ってます。私はあなた方の魂を愛するから、時々烈しいことも言いますけれども。それは本当にこの集会に来ているかぎりには、その気合で行ってください。これが、

「汝らのうちにキリストの相成るまで」

とパウロがこのガラテヤ書4章19節で言っている言葉です。忘れないように。

かくして、我々はキリストの同相会員となった。それがただ名ばかりの会員ではダメだ。そして、「その同じ相と成るまでは」だから、それはもう限りなく行くんです。これでいいなんていうところはありはしない。いよいよ相より相へと、同相より同相へと展開していく。これが、

「信仰より信仰へ、恩恵より恩恵へ、讃美より讃美へ」

と。みな同じことです。

私たちは本当の生命を、そういう熾んな生命を――お互いさま語るも聴くも同じこと――戴こうとして日曜をやっているわけだ。それでまた一週間を突っ走って、いよいよ生命づけられいく。一週間を突っ走って、いよいよ生命づけられやって来ないとダメですよ。

「くたびれました」

なんて言ってやって来たんでは。

「もつと行きます」

と言ってやって来なくては。

「もう大体、金曜、土曜になるとカラカラになってしまいうんで、日曜日にまた生命の水を飲みに来た」

なんていうのではしょうがない。

「溢れてしょうがないから、もつと溢れさせてください」

というのでなければ。

あなた方、祈りで本当に力を得ているかい？ 祈りはただお願いではないですよ。祈りの世界でキリストと同相の世界に入っていく。そうしたら、お願いしようと思っていたものがどこかへ行ってしまうって、知らないまにお願いが全うされていたなんていうことになってしまう。簡単なんです。それは、具体的なことをお願いして結構ですよ。結構だけれども、具体的なことの奥の世界をいつも忘れないように。

それは正に、内も外もなき、本当の内であり、本当の外であるということです、もうひとつ逆説的に言えば。こういう詩を聞いたら、楽しいですか。私は楽しくてしょうがない。また、その第二節におもしろいことを言っている。

「あなた方は本当の外側を、本当のみかけを喜んでごらん、真剣なる遊びを」



と。こういう矛盾の言葉で言うんです。余裕のある気持はみんなそうなんです。「真剣なる遊び」だとか、「本当の外側、本当のみかけ」だとか。

「いかなる生きとし生けるものも、単なる孤独、個なるものではない。いつも個における多である。」

と、妙なことを言っている。これが一、即多^{い、た}ということなんです。いわゆる全体主義ではないです、これは。間違えてはこまる。エクレシアの構造がそうなんです。

キリストと同相

²⁰ 今なんじらに到りて我が声を易^かえんことを願う、汝らに就きて惑^{まど}えばなり。

それから、イサクとイシマエルのことが書いてある。

²¹ 律法の下にあらんと願う者よ、我にいえ、汝ら律法をきかぬか。²² 即ちア

ブラハムに子二人あり、一人は婢女^{はしため}より、

ハガルから出たところのイシマエルという子です。

一人は自主の女より生まれたりと録されたり。

自主自由の女サラから出たところのイサクです。昔ですから、そういうことがあったわけです。正妻と傍妻の、サラとハガル。サラがうまずめでなかなか子どもがいないものだから、ハガルに産ませた。サラがまたそういうように言いもしたんだからね。

²³ 婢女^{はしため}よりの子は肉によりて生まれ、

即ち普通の男女関係で生まれた。

自主の女よりの子は約束による。

これは神さまの約束による子である。アブラハムは、とてもサラからは子どもがなからうと思うようなときに、しかし、このサラからたくさんの子が出て子々孫々のことを約束された。それをアブラハムが「はい」と言つて受けとったというのが、例のアブラハムの信仰です。創世記15章です。

²⁴ この中に譬^{たとえ}あり、二人の女は二つの契約なり、その一つはシナイ山より出でて、

即ち、ハガルの方です。「シナイ山より出でて」とはモーセの律法のことです。

奴隷たる子を生む、これハガルなり。²⁵ このハガルはアラビヤに在るシナイ

山にして今のエルサレムはその子らとともに奴隷たるなり。

いわば今のエルサレムと同じことで、地上のエルサレムということです。地上のエルサレムではダメだと。即ち、いわゆる「エルサレム、エルサレム」と言っている「エルサレム」ではダメだと。これはキリストも言われたでしょ。

「エルサレムでもなければ、ゲルジムでもない。いたる所で神さまを拝する時が来る」

と言った。即ち、天界のエルサレムを持たなくてはいかんと言われた。



26 然れど上なるエルサレムは、
即ち、地上のエルサレムに対して天上のエルサレムは、
自主にして我らの母なり。

これは信仰の母です。

27 録^{うますめ}している『石女^{いしにょ}にして産まぬものよ、喜べ。産^{うみ}の苦痛^{くるしみ}せぬ者よ、声をあげて呼^{よば}われ。独住^{ひとりずみ}の女の子は多し、夫ある者の子よりも多し』とあり。

というのは、サラは石女であつたけれども、また、約束の子を与えられて、「それを献げろ」とまで言われたですね、創世記22章で。そういった胸突き八丁を彼は突破してきたんだ、信仰で。そういうわけで、かえってそれの方が祝福されてしまった。律法ではなくて、福音だと。その律法と福音を、ハガルとサラに例えてまた言っているわけです。

28 兄弟よ、なんじらはイサクのごとく約束の子なり。

アブラハムの信仰の裔として約束された子である。

29 然るに其の時、肉によりて生まれし者、御霊によりて生まれし者を責めし
ごとく今なお然り。

いまもなお、そのようにして、律法が福音を責めているような事態では困るではないかと。

30 されど聖書は何と云えるか『婢女^{はしため}とその子とを逐いいだせ、婢女の子は自

主の女の子と共に業を嗣^つぐべからず』とあり。

これは創世記21章です。この福音を守りこの福音に付き、律法の世界に縛られるなどというわけです。

31 されば兄弟よ、われは婢女の子ならず、自主の女の子なり。

そういった歴史的なものを、そういうように例えて、パウロ一流の言い方をしているわけです。福音の子らがまた律法的になったらしょうがないから、その点はどう考えても、御霊の世界に本当に入つてそこにその生命を、キリストと同相になればもう内も外もなしという、そういう在り方になっていくぞと。その点で、ゲーテのこの言葉は大変うれしいでは、今日はそのへんで。

